

草津市立矢倉小学校通信 令和元年6月14日 NO.5



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

大きくなったら…

「大きくなったら何になりますか？」誕生日を迎えた子どもによくする質問だ。

小学1年か2年の頃、祖父から大きくなったら何になるつもりか尋ねられたことがある。ちょうど、その少し前に、学校で「大きくなったら」という作文を書かされ、なりたいものを「船長」として綴っていた。その作文が家族で回し読みされ、孫の将来があまりにも現実離れしており、苦労するのではと心配したからにちがいない。

いいかげんなことをするのはよくない、どんなことも心を込め、させていただくという姿勢でいるようにと常々語っていた祖父が、真剣なまなざしで尋ねてくるものだから、その作文は思いつきで書いたもので、だから当然ウソであり、でたらめなんだと言えず困ってしまった。

実は、その作文には事情があった。担任の先生があまりにもしつこく、いわゆる子どもらしい夢のある楽しい作文を書かせようとしたのだ。今の私ならそれなりに書けるだろうが、あの時はそんな技量もなかった。「大きくなったら」という題名をめぐり、先生はやってみたい職業、仕事を自分たちに発表させ、黒板に書き連ねた。そしてどれがいいかわいあい言いあいっこさせた。何の予定も定めていない自分としては、思い悩んだあげく、とりあえず「船長」というのを選び、なんとか先生の期待に応えねばならなかったのである。大きな客船を操縦して外国まで行くことにしておけば、なりたいわけや仕事ぶりが想像でき、作文が書ける。なんとかその場をやりすごせると思ったのだ。あの頃、読んだ絵本で、船が遭難して沈没しそうになった時、乗客を一番に避難させ、自分にはまだ仕事があるからと、引き留める船員を振り払うようにして沈みかけた船に戻っていくシーンがすごいなあと感動したというのもあったのである。

祖父はそんな事情にはもちろん気づいていない。とても真剣に尋ねたものだから、その気迫に押され、うまく説明することもできず、私はだまりこくってしまった。やがて、困り果てている私に訊かなくていいことを訊いてしまったなと気遣うように「ああ、悪かった悪かった」と謝り、こんなことを語ってくれた。どんな仕事も世のお役に立つのであれば尊いこと、今はこれだと言えなくていいから、とにかく世のお役に立つ人にならせてくださいとお願いしていくこと、これだけは忘れずにいろいろなことに心を込めて取り組むこと、であった。

将来の夢や進路といったあこがれの姿、なりたい職を安易に語らせ、そこから少しでも外れると、自分ではできのわるい人間で、期待を裏切ったのではないかと自身を責めさせてしまうような大人の無責任なかわり、世の風潮ほど罪つくりなことはない。人は追い詰められると、相手の意をくんで、なんとかそれに応えようと努力する。面と向かって真剣に言葉をかけられるとなおさらだ。このことをよく承知していた祖父は、どんなになってもこれだけは失わずにいてほしいと、「お役に立つ」という言葉で、人から認められ、感謝される生き方が、幸せのもとだと教えてくれたのだろう。

近く誕生日を迎える子がいる。「大きくなったら何になりたいですか」ではなく、「どんな人になりたいですか」くらいの質問をしたい。

校長 大林 道範